

「古代枕詞の究明」三浦茂久著

読売新聞 2012.04.08 東京朝刊 12頁 (全523字)

◇評・三浦佑之(古代文学研究者立正大教授)

歌は、日常の表現とは別の詩になるために、比喻や掛詞(かけことば)や音数律などさまざまな技法をもつ。その代表ともいべき枕詞(まくらことば)は、今は意味さえわからない場合が多い。あまりに解釈がむずかしいためか、研究者も敬して遠ざける。

その枕詞に、著者は果敢に踏み込んでゆく。先行研究への目配りを忘れず、丹念に古代の言葉に向き合い、生活や自然など周辺諸学に対する広い知見も取り込みながら枕詞を解釈した労作である。

たとえば、奈良という地名にかかる枕詞「あをによし」では、壁を塗る材料となる●(すさ)を混ぜた赤土がアヲニ(塗り渡す赤土の意)で、「あをによし奈良」というのは、その赤土を平らにならして塗るから奈良に掛かるのだと著者は言う。アヲを「塗り渡す」と解釈するためには詳細な説明が必要だが、著者の論述を読むとなるほどと思わせる。

ただし、取り上げられている枕詞の解釈が妥当か否かの判断は、今後なされるであろう議論の先にしか見いだせない。とりあえずは、少々沈滞気味な感じのする万葉集研究が元気を取り戻しそうな枕詞論が出現したことを慶(よろこ)びたい。

(作品社、6800円)

〈DB注〉

●は「くさかんむり」に「切」

読売新聞社

本サービスにおける著作権および一切の権利は株式会社ジー・サーチまたはその情報提供社に帰属します。
本サービスの出力結果を複製、複写、出版、販売または第三者に対し配布することは禁止されています。